

LOST and FOUND

レジデンスレポート

横浜ダンスコレクション EX2014

「若手振付家のための在日フランス大使館賞」

2014年2月、私は日本の横浜で開かれた横浜ダンスコレクション EX 2014に参加し、「The Skill for me」という作品で若手振付家のための在日フランス大使館賞を受賞しました。そして、その副賞として6ヶ月間フランス国立振付センターでレジデンスをするチャンスを得て、同じ年の7月から12月までレジデンスの時間をいただきました。レジデンスを終えて帰国した時、多くの方が私に「フランスでの研修はどうだった？」と聞きました。しかし、私の出来る答えは単純に良し悪しで表現できるようなものではありませんでした。なぜなら、そこでの異質な経験と多様な感情がまるでクロワッサンの生地のように幾重にも重なり合い、またはごっちゃ混じりの状態で簡単に整理出来なかったため、それに合う言葉を選ぶ事も正確な答えを出す事も出来ませんでした。そして、研修の期間と同じ時間である6ヶ月が過ぎた2015年6月、この時点がある意味でその時を整理するには良い時期であると感じました。

2014年7、8月のパリジャンは都市の外へ夏休みに出かけますが、その空いた空間を観光客が埋めつくしてくれたおかげで、私は人と活気に溢れるパリを見ることが出来ました。どこへ行っても観光客のカメラがあり、その多数の異邦人と一緒に都市で暮らしながらパリに慣れていきました。また、パリのレジデンス先であったパリ国際芸術都市(Cité des Arts)が提供してくれたアーティストカードでいろんな美術館の素晴らしい展示が無料で観覧出来るという恵みがおまけに付いていました。そんな中、しばらく隣の国にあるウィーンに行き、インパルスタント -ウィーン国際ダンスフェスティバルのワークショップに参加しました。その中のエマニュエル・ユインとマチルド・モニエのワークショップを紹介します。

横浜ダンスコレクションの特別審査員であるエマニュエル・ユインのワークショップ「Invisible school」ではポスト・モダニズムの舞踊歴史から現在の現代舞踊の流れや、彼女の作品創りの話まで聞くことが出来ました。また、スカイプを使って振付家のジェローム・ベルとの対話、アルゼンチンに住んでいる現地人との経済の流れに対する対話、IKEA工場の見学、ニジンスキーの春の祭典の再解釈など、境目のないワークショップで、彼女の実質的かつユニークなやり方に大変刺激を受けました。

マチルド・モニエのワークショップ「memory」は、身体の記憶を主題に体が単純に個人の歴史を含んでいる有機体に限られているのではなく、無意識に国家・文化・歴史・社会的な影響を受け入れて、それを記憶し、記録している存在であり、身体が取る態度や表現もやはりそれを基に取れる行為である事を悟りました。そして、一人一人の身体の記憶をリサーチしながら作品を作ってみると、自分の身体の単なる傷一つでも記録物として身体を再認識する新しい経験をする事が出来ました。

9月には、3週間モンペリエ・ラングドック＝ルシヨン国立振付センターでレジデンスを行いました。デボラ・ヘイとディディ・ドゥヴィリアの‘writing, touching, observing, moving’ワークショップでモンペリエ国立振付センターEX.E.R.CEの学生たちと一緒に参加しました。そして、多様な実験と自分の作品作りをリサーチする時間を過ごしました。また、とても自由なスタイルで個人の個性を尊重しながら、お互いに相手の先生になりました。私は皆にフィードバック受け、また逆に質問をしながら創造の過程で無意識に行われる行為と考えを意識的に発見する時間を過ごし、またそこでの混沌と悟りを繰り返しました。そんな中、自然に自分の作品である「Homo knitiens」が始まったのです。

10月には、ローヌ・アルプにあるリリュ＝ラ＝パブ国立振付センターでレジデンス及びデモ・クリエーションを行いました。滞在先はまるで山奥の別荘のように建てられた木の建物で安らぎがありました。そうした集中できる環境は、作品作りに大きな助けとなり、午前中はユヴァル・ピックのカンパニーのワークショップに参加して、そのカンパニーメンバーと一緒に授業を受け、午後は自分の作品創りをしながら過ごしました。

毎日変わる海の表情と空の色と光、しばらく止まって去って行く虹たち。

満ち潮と引き潮の間だけその中身を見せてくれるモンサン・ミッシェルは1年、毎日見ても飽きないくらい美しかった。フランスで一番安らぎを感じながら日没を見たのもこの時だったように思えます。蜜のような休みが終わり、舞踊博物館／レンヌ・ブルターニュ国立舞踊センターに移って、レジデンスを続けていきました。

11月のレンヌは大きなフェスティバルが行われる時期であるため多くの公演を見る事が出来ました。マギー・マラン、ボリス・シャルマツ、メッテ・インヴァルセンなど現在におけるフランスのコンテンポラリーダンスの所在を感じるほど素晴らしい公演でした。その中でも、一番良かったことはエマニュエル・ユインが住んでいる地域であったため、彼女と会って一緒に過ごすことが出来たことでした。いつも耳を傾けてくれて、私を応援してくれる応援者がいるということに感謝し、たくさんの力をもらう事が出来ました。そして、ランスでは横浜ダンスコレクションで上演した「The Skill for me」を再演する機会を得て、韓国から一緒に公演するミュージシャンもフランスに来てくれて、しばらくの間、新作「homo knitiens」から離れ、公演準備に力を注ぎました。特別な縁で出会ったフランスの振付家リュック・ペットンがフェスティバルに私を推薦してくれたおかげで上演することが出来たのです。まるで、旅行を行ってきた気持ちでランスでの公演は無事に終わり、再び新作「homo knitiens」に集中しました。

ここでリュック・ペットンとの出会いを話すと、8月にリヨンにある彼の稽古場に私を招待してくれて、そこで数日滞在しながら彼の新作に出演する鶴(crane)と一緒に世話しながらお互いの作品制作の話を交わす時間を持ちました。自然と動物、そして先輩芸術家と一緒に過した時間はとても新しい経験であり、2016年にソウルで公演される「Light Bird」に出演するこの雛たちがどのようにダンサーたちと作品を創っていくのかとても興味深く感じました。

12月、最後のプレゼンテーションを前にして再びパリに戻り、フランス国立ダンスセンターに泊まりました。冬のパリはとても憂鬱で、少しでも気を許すとすぐ気持ちが天気と同じく憂鬱になってしまいます。プレゼンテーションを前にした12月は、一番時間の流れが速かったように思います。プレゼンでは「Homo knitiens」のために自分の洋服を貸してくれた友人、アンスティチュ・フランセ、横浜ダンスコレクションの審査員レベッカ・リー、フランス国立ダンスセンターの芸術監督マチルダ・モニエ、その他たくさんの人に協力していただきました。その場は私にとって6ヶ月間のフランス国立振付センターの研修を終えるための「Homo knitiens」という新作をお見せする時間でしたが、それと共に過ぎた6ヶ月の時間と足跡をみなさんに見せる場でもありました。

そして、みなさんへの感謝の気持ちで舞台上上がりました。そのおかげか一人で踊ったソロにもかかわらず、多くの人と時間とその空間を一緒に共有するようでした。

振り返ってみれば、フランス国立振付センターの研修は孤独な時間でもありましたが、お金には代えられない貴重な時間であり、自分自身をより知り、二度と味わうことの出来ない大事な経験でした。その間、とても多くの方々が力を貸してくれて、応援してくれたこと。そして、私はよく頑張ったと自分自身を褒めたいと思います。

舞踊博物館で会った振付家ボリス・シャルマッツが言ってくれた言葉のように時を過ごした気がしています。「Lost and Find in France」

これからも毎年「若手振付家のための在日フランス大使館賞」でアーティスト1組がフランスで6ヶ月を過ごすことになるでしょう。

その人たちに恐れ入りながらこのように伝えたいと思います。

「出来れば底まで下がってみてください。可能であればより多様な自分の姿と出会ってみてください。そして、その過程で自分を失ってまた見つけてください！すべての面で！」

2015年7月

クォン・リョンウン

(翻訳：岡田恩圭)